



# 結婚相談所を介した配偶者選択における「見合い／恋愛」の概念分析：インターネット上の成婚談を利用して

成田, まお

---

**(Citation)**

社会学雑誌, 39:158-175

**(Issue Date)**

2022-11-30

**(Resource Type)**

departmental bulletin paper

**(Version)**

Version of Record

**(JaLCD0I)**

<https://doi.org/10.24546/0100482584>

**(URL)**

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/0100482584>



《投稿論文》

# 結婚相談所を介した配偶者選択における「見合い／恋愛」の概念分析

—— インターネット上の成婚談を利用して ——

成田 まお

神戸大学大学院人文学部研究科博士前期課程

本稿の目的は、結婚相談所を介した配偶者選択における、配偶者選択の「正当性」に関する論理Ⅱ規範を明らかにすることにより、「見合い結婚／恋愛結婚」というカテゴリーの意義を再考することである。結婚相談所ホームページにおける成婚談を対象とし、カテゴリーと概念の間の規範的な結びつきを調査したところ、「成婚相手」というカテゴリーは「居心地の良さ」や「自然さ」と結びついていた。また両者の関係に「相性・「ご縁」「運命」という概念を結びつけることで、さらに強力で配偶者選択の正当性が保証されることが明らかになった。成婚相手を「運命」と形容することのような実践は、相談所を通じた結婚が「見合い／恋愛」の「恋愛」の側にあることを実践者自身が主張するようなく、むしろその枠組みを使用することがいかなる意味を持つのか、という形で研究の可能性・必要性を示唆しているといえる。

## 一 はじめに

本稿の目的は、結婚相談所を通じた配偶者選択における、配偶者選択の「正当性」に関する論理Ⅱ規範を明らかにすることにより、「見合い結婚／恋愛結婚」というカテゴリーの意義を再考することである。

結婚相談所（以下「相談所」）における配偶者選択はその形態上、「結婚への意思」が「交際相手の存在・選択」に先立っていると考えられている。そのため、そうした配偶者選択方法を採用する者（以下「相談所成婚者」）に対しては「なぜ他でもないその相手が選択可能なか」「結婚がしたい」だけなのだとしたら、必ずしも現在結婚が成

立している相手でなくてもよかったのではないか」という懸念が寄せられる可能性が常に存在する。

このような懸念の表明は、相談所を利用することなく配偶者選択を行った人々へのみ固有のものではない。相談所成婚者たちが結婚に至るまでのエピソード(以下「成婚談」)の中では、入会前に抱いていた相談所イメージについて、「普通の」出会い方ではどうしても結婚できない人が利用する最後の砦」「入るのが恥ずかしく、好きでもない人とお見合いを強要される場所」と記述される場合すらある。しかし、だからこそ相談所成婚者は、かつての自分自身と同じ懸念を抱いているであろう世間の人々や、かつての自分自身と同じ立場から相談所への入会を検討している人々に対して、自らの配偶者がまさに、この相手でなければならなかったのだ、ということの説明する必要性に迫られるのだ。

それでは、相談所を通じた配偶者選択では、一体いかなる論理Ⅱ規範に則ってその「正当性」や「必然性」が達成されているのだろうか。これは「相談所に入ってよかった」ということをどのように説得的に示すのか、その論理の一端を形作る実践となつていないはずである。そうした実践の中で利用されている論理Ⅱ規範を記述することにより、配偶者選択がどのような論理Ⅱ規範のもとで理解されてお

り、それが何を意味しているのかを示すことができる。よって、本稿は以下のような構成をとる。まず第二節に

において、先行研究における「見合い結婚／恋愛結婚」枠組みの取り扱われ方を概観し、既存の配偶者選択研究とは異なるアプローチをとる本稿の意義を明らかにする。第三節で調査対象・方法についてまとめ、第四節では、結婚相談所ホームページにおける成婚談の中で、「成婚相手」というカテゴリーがいかなる概念とどのように結びついているのか、また両者を結びつける作業がどのようなカテゴリーのもとで行われているかを記述する。第五節では、それが「見合い／恋愛」とどのように関連づけるかを考察し、そこに存在する論理Ⅱ規範が、実践者および配偶者選択研究にとって何を意味しているのかを明らかにする。

## 二 先行研究

佐藤博樹らが述べる通り、「一九九〇年に報じられた『一・五七ショック』は、国民の多くに衝撃を与えるもの」であり、また「とりわけ政治家や政府に与えた衝撃が大きかった」という(佐藤・永井・三輪 二〇一〇:二)。「未婚化・晩婚化による少子化」という流れが統計的な数字として目に見えるようになった一九九〇年代以降、配偶者選択は多くの人々にとって「社会問題」として認識されるようになった。このような研究背景により、大規模な質問紙調査をもとにした量的分析が盛んに行われてきたことが、まずもつ

て配偶者選択研究の大きな特徴であるといえる。

ここで確認しておきたいのは、一見当たり前のように思えるかもしれないが、実践的課題を念頭に置く調査・研究では、基本的に人々が「現に」どのようなか（実態）、または「現に」どのように考えているか（意識）の把握が目的とされているという点である。例えば、本稿ではのちに「見合い／恋愛」という分類法について取り上げていくが、これは配偶者選択に関するもっとも代表的な大規模調査である「出生動向基本調査」において、既婚者が「現在の相手と出会ったきっかけ」を分類するものとして使用されている<sup>1)</sup>。この点から見ると、「見合い／恋愛」といった種々の区別もまた、人々が「現に」どのようなかを明らかにするために役立てるために採用されていると考えることができるだろう。

しかしながら、人々が「現に」どのようなか（どのように考えている）かについて調査を行おうとすると、「調査の結果得られたデータが『本当に』『現実の』『実際のな』問題を反映しているのか」という認識論的問題が必ず持ち上がることとなる。もちろん、このような問題にもかかわらずそうした調査・研究が必要となる場面があること、そしてそれが実践的目的に対しては有用でありうることを否定するものではない。しかし本稿では、人々が語ったとされるその内容が、互いにどのように結びつき、一定の理解

可能性を示しているかということ——すなわち、テキストの中で用いられている論理そのものを追究することを目的としている。それは、人々の意識や実態を直に把握しようとする際にはむしろ議論の前提とされ、後景に退いている問題である。しかし「配偶者選択がどのような規範や論理を前提として成立しているのか」という問いに一定の見通しを与えることができるならば、既存の配偶者選択研究にとっても有益であることが期待できよう。

上記の問題関心は、「配偶者選択規範」への関心と言い換えることもできる。配偶者や配偶者選択に対する人々の規範・基準には、「結婚観」をキーワードとした多くの研究蓄積がある。これらの研究に関しては、「結婚相手に求める条件」といった項目による大規模な量的調査はもちろんのこと、雑誌・新聞などの資料を用いた歴史社会的分析が比較的多く行われている点に特徴がある。

前者の量的調査における代表的な問題関心は「どのような選択規範が配偶者選択に有効にはたらくているか」ということであり、例えば小林盾・能智千恵子（二〇一六）では女性の上昇婚志向、男性の低年齢女性志向などが明らかにされている。しかし、こうした知見は「どのような条件を求める人が結婚に到達しやすいか」「どのような要因が結婚を促進するのか」という問いを解消するための資源にはなりうるが、「なぜその人でなければならなかったのか」

という疑問を解消してくれる資源としては利用不可能である。すなわち、「学歴が自分より高かったから」「経済的に豊かだったから」「自分より年下だったから」という答えは、「その人でなければならなかった」という主張の根拠としては利用不可能なのである。これだけでは「より高学歴・高収入・低年齢であれば他の人でも良かった」と言えてしまうため、「なぜその人でなければならなかったのか」の説明にはなりえないし、そもそもそうした「条件」を根拠として語ることは、相談所の成婚談の中でも明確に避けられている（後述の事例を参照のこと）。

一方、歴史社会的アプローチからは、デビッド・ノッターが『婦人公論』や『主婦之友』などの雑誌上の言説を対象として比較歴史社会的分析を繰り返しているほか、桑原桃音が新聞の「身の上相談」を用いた結婚観の研究を行っている（ノッター 二〇〇七・桑原 二〇一七）。いずれも雑誌・新聞を資料として結婚観の成立を研究している点特徴的であるが、より重要なのは、著者らがそれぞれ、「見合い／恋愛」という図式に対して疑問を呈しているという点である。例えばノッターは、そもそも「恋愛結婚」という言葉の曖昧さは学術的用語として問題があると指摘する。結婚する当事者による「自由選択」が行われている結婚を「恋愛結婚」と呼ぶ既存の研究に対し、ノッターは、「見合い／恋愛」を区別することのできない形態Ⅱ「友

愛結婚」が行われていたと言うのである。同様の観点から、「恋愛結婚」という語の意味が変質・拡散し、あらゆる結婚を「恋愛結婚」と呼ぶことが可能となっているという主張を行う論者も、二十年以上前から存在している（加藤 二〇〇二・一五）。

桑原はこれらの知見、すなわち「見合い／恋愛」が二者択一ではないこと、また「見合い」「恋愛」とされる形態にも、配偶者選択主体の問題や、結婚する本人の志向性などさまざまな側面が含まれることを踏まえた上で、「明治から戦前には複数の家族形態と心性のパターン、配偶者選択のあり方が存在する可能性を念頭に置きながら、配偶者選択にかかわる結婚観を検証する」（桑原 二〇一七・四五）。上記のような複雑性を描き出すため、桑原も「恋愛結婚」という枠組みを使用しており、ノッターと同じ戦略をとっているといえるだろう。

ただし、このようにさまざまなアプローチによって行われてきた配偶者選択規範の研究は、あくまで研究者の側から見た（規範）を明らかにするものとして存在してきた。だからこそ「見合い／恋愛」という枠組みを見直すという文脈において、「本当は」「実際には」「誰が配偶者選択を行っているのか」という点が問題となるし、さらには「見合い／恋愛」枠組みに代わる、あるいはそれを補うような分類法式を作り出そうとする者が現れるのである。

もちろんながら、研究者にしか観察できない〈規範〉を指摘したり、新たな結婚の分類法を提示したりすることが重要な局面が存在するということを否定するものではない。だがそのことによって、成員にとって重要である「規範」や「枠組み」が、研究者にとつては利用不可能である・不適切であると考えるのは、やや早計であると言わざるを得ないだろう。少なくとも社会学の営みのひとつとして「行為者の指向性を理解する」という方向性がある以上、まずもってそうした方向が目指されてもいいのではないだろうか。

こうした状況を考えると、既存の配偶者選択規範研究では、「成婚者が書いたとされる文の中で現に使用されているのは、あくまで『見合い／恋愛』という枠組みである」ということの重要性を見逃してきたといえるのではないだろうか。換言すると、「見合い／恋愛」という枠組みを打ち消すことにより、現代日本で規範的に指向されているのがあくまで「恋愛結婚」であることの重要性をあまり打ち出せていないのである。

ここには、研究者の側から〈規範〉を考えることの限界が表出している。つまり、一方で「見合い／恋愛」という枠組みは、結婚形態の分類法としては曖昧で不適切なものとして考えられている。しかしながら、人々によって使用されている概念である限りそれはたしかに社会的事実として「存在」する概念であり、こうした枠組みがなぜ・どの

ような仕方で使用されているのかということは無視して、「見合い／恋愛という分類枠組みは利用不可能・不適切」とすることはできない。人々の意識や実態に興味があるにせよ、そこで使用されている規範に興味があるにせよ、今われわれが理解したいのは、まさに社会の中での人々の実践だからである。

したがって本稿では、まずは実際に「見合い／恋愛」の枠組みを用いることで、成婚者とされる人々が何をしているのかを明らかにすることを試みる。その上で明らかになった知見が、既存の配偶者選択研究にいかなる貢献を行うことができるのかを最終節において示していきたい。

付言しておきたいのは、このことは成婚者が実際にどのような感じているのか、また成婚談が本当に成婚者自身によって書かれたものであるかどうかを考慮に入れることを意味しないということである。むしろ「主体」が実際には誰であるのか、また書かれている出来事が実際に生じていたのかは一切不明であったとしても、そのエピソードがどのようなカテゴリーのもとで記述されており、その中でどのような論理・規範が展開されていくのか、という点に注目したい。何度も述べてきた通り、本稿は人々の実態や意識を直接的に見ようとするものではなく、あるテキストの中で何が「実態」「意識」として提示されるのか、そして提示されたものがどのように互いに結びついているのかとい

うことを記述する。そしてこの結びつき自体も、「実態」ではなく「論理」＝「規範」であると捉えることにより、指向されている行為のあり方を記述していきたい。だからこそ、「本当に成婚者自身が書いた成婚談なのかどうか」よりも「成婚者自身が書いたものとして受け取ることのできるような書かれ方がなされているかどうか」のほうが、本稿の目的にとってはより重要となるのである。

### 三 調査概要

#### 三・一 調査対象・方法

本稿では、相談所のWEBサイトに掲載されている成婚談<sup>3)</sup>を分析する。成婚談の大きな構成は以下の通りである。

- ・ 加入に至ったきっかけ
- ・ 活動前の思い
- ・ 活動の感想（よかった／嫌だったこと、乗り越え方等）
- ・ 現在の成婚相手との出会い方、仲の深め方
- ・ 現在の成婚相手を選んだ理由
- ・ 入会を考えている人へのメッセージ

成婚談には会員が結婚に至るまでのエピソードが記されているが、その前置きとして、話者の属性（名前・年齢層・

性別・活動年数・見合い人数等）が提示される。また相談所により、その形式はアンケート（自由記述）・インタビュー・年表・仲人の語り・漫画等さまざまである。今回は成婚者の語りをそのまま掲載しているという体裁をとっている。アンケート／インタビュー／年表形式の成婚談を対象とする。なお、前述の構成は聞き取り形式によって前後する。質問項目も相談所によってバラつきがあるが、内容はほぼ同じである。

事例はすべてWEBサイトを通じて取得した。ただし個人の特定を防ぐため、名前のイニシャル（表記されている場合のみ）・性別・年代および取得日のみを記すこととする<sup>4)</sup>。

なお前節で示した通り、本稿の目的は、成婚談の中での概念の用いられ方・結びつき方の検討である。よって本稿では以下の事例を、「概念の用法を『思い起こす』ためのもの（『リマインダー』）」（小宮 二〇一〇一・一三〇）として用いることとする。

#### 三・二 結婚相談所における配偶者選択の流れ

次節に入る前に、相談所の仕組みについて説明しておきたい。相談所は見合い相手の紹介方法によって、大きく「データマッチング型」「インターネット型」「仲人・結婚相談型」に分けられる（野々山 二〇一四・経済産業省商

務情報政策局サービス産業課 二〇〇六)。以下では見合  
いから成婚に至るまでの標準的な流れを紹介する。

「データマッチング型」は、相談所に加入した者（以下  
「会員」）が登録したデータをもとに、独自のアルゴリズム  
に従ってシステムが自動的に相手を紹介するという方法で  
ある。システム上で選ばれた候補者を見て、会おうと思っ  
た場合は相手に申請を行い、日程・場所を相手と直接交渉  
した後、喫茶店等で見合いを行う。

「インターネット型」は、他の会員のプロフィールデー  
タを検索して相手を探す方法である。会員は居住地・年齢・  
年収・趣味等さまざまな絞り込みを行って希望に叶った相  
手を見つけ、申し込みを行う。この場合も基本的には会員  
同士が直接コンタクトを取り合う。

「仲人・結婚相談型」は、専属の担当者が相性の善し悪  
しを判断し、会員に見合い相手を紹介する方法である。担  
当者は「仲人」「コンシェルジュ」等と呼ばれ、見合いのセッ  
ティング、マッチング初期の連絡や成婚までの各種サポー  
トを引き受ける。

見合い相手の選択や基本的な連絡方法は異なるが、いず  
れの場合も、互いに再び会いたいと感じたら「仮交際」と  
いう状態に入る。仮交際中は複数の相手と交際することが  
認められている（ときに奨励されている）ので、会員は同  
時に複数の相手と交際を重ねながら相手を選択していくこ

とになる。

仮交際を進める中で結婚を意識する相手がいたら、「真  
剣交際」を申し込む。真剣交際中は他の人との交際を行っ  
てはならないとされているため、真剣交際を申し込んで断  
られた場合、断られた側は他の人との仮交際をやり直すこ  
ととなる。真剣交際を経て、結婚に向けての互いの気持ち  
が固まったら成婚に至り、退会する。

なお、本稿で使用するデータが掲載されている相談所で  
は、主力としている方法がそれぞれ異なる。しかしほとん  
どの相談所が上記三種類のサービスを提供しているため、  
事例中の人々の出会い方は場合によりさまざまである。

## 四 結果

### 四・一 結婚相談所における「結婚」のあり方

そもそも相談所における「結婚」は、成婚談の中で一体  
どのように位置づけられているのだろうか。

正直、入会する前は結婚相談所なんて、お金がかか  
るし、古くさいイメージでした。お世話してくれる人  
は高齢のおばちゃん、本当にどうしようもなく結婚で  
きない男女の最終手段の場所、妥協してしまっている  
んだとまで思っていました。「Kさん／三〇代／女性／

二〇二二年四月一五日取得」

〈選ばれた婚活タイプについて、その背景をお聞かせください。〉

結婚相談所に入っても、良い人はすごく倍率が高いなどと聞いており、このような場所は結果に繋がらないだろうと、やや懐疑的に考えて今まではなかなか入会する気が起こりませんでした。ですが、自然な出会いで交際した人が結婚する気がなかったという痛い思いを直近で経験。生涯独身の自分は想像出来なかったので、やはり結婚を真剣に検討したいと考え、ダメ元で始めてみよう、あまり自分にプレッシャーをかけず軽い気持ちで入会しました。「Hさん／三〇代／女性／二〇二二年四月一五日取得」

前者と後者では「結婚相談所」という場に対するイメージが大きく異なることが窺えるが、ここで注目したいのは、むしろこれだけイメージの乖離があるにもかかわらず、両者ともが相談所での出会いの形態を「特異な手段」あるいは「不自然な手段」として捉えている、という点である。

だがこの成婚談の中で、彼らはすでに成婚している、いわば「成功者」である。そのため入会を検討している者や世間の人々に対して、彼らは相談所での成婚の「経験者」

かつ「成功者」としてふるまうことができる。そして、まさにその「経験者」というカテゴリーのもとで「成婚相手」と「運命」との結びつきを示すことによって、成婚談の中では「見合い結婚」が「普通であること」として、あるいは「普通よりもよいこと」として示される。少し長いが、事例を提示しておきたい。

〈入会前と後で、結婚相談所のイメージは変わりましたか？〉

〔男性側〕入会前は、職場などで異性との出会いがほとんどない方やお仕事が忙しくて時間がなかなか取れない方、異性との付き合いが苦手な方や容姿に自信がない方、ご年齢が上の方が結婚相談所のサービスを利用するイメージがありました。

〔女性側〕私も、入会前は結婚相談所って面倒な決まりごとが多そうだな、とか、カウンセラーさんが付くとは言っても、どこか他人事なんだろうなあと思っていて、正直そんなにいいイメージは持っていなかったですね。

〔男性側〕でも、実際に入会してみると、入会前に抱いていたイメージとは異なり、結婚相談所の認識が変わりました！

職場などで異性との出会いがほとんどない方や、お

仕事をされていて婚活に時間が取れない方がいたのは入会前のイメージ通りでしたが、登録されている方の年齢層や職種等も幅広く、人数も多く、プロフィールを見ても素敵な方がばかりで、実際にお会いした方々もとても素敵でした！

〔女性側〕私は…正直なことを言うと、実際に活動を始めてみても、すぐに入会前のイメージが大きく変わったということはなかったんです。結婚相談所のイメージが変わっていったのは、活動を進めていく中でのことですね。特に印象に残っているのは、カウンセラーさんに紹介してもらって出会った彼と、結婚することが決まったときのことです。彼と二人でご挨拶に伺うと、カウンセラーさんが私たちのことを本当に喜んでくださって。その時、ここが私たちの出逢いの場所、この方たちが、私たちを引き合わせてくれたんだな…と。すごくうれしくなりましたし、そう実感しました。成婚退会した今、活動を振りかえると、結婚相談所という場所に出逢いの場所のひとつであるという認識に変わりはないのですが、とても心のこもった出逢いの場所だと思えます！\*\*\*〔相談所名〕に入会する前と、入会した後のイメージがあまりに違いすぎて、少し笑ってしまいそうですね〔笑〕「Uさん・Tさん／四〇代／男性・女性／二〇二二年四月一五日取得」

この事例では、入会前と入会後を〔実際に入会してみると〕【実際に活動を始めてみても】という言葉によって比較しているが、このことは相談所成婚者が「経験者」として語っていることを示しているとみることができる。また前者のUさんはこのことよって、「思っていたイメージとは異なり、よいことである」ということを説得的に述べること成功している一方、Tさんは【出逢いの場所のひとつ】という言葉によって結婚相談所の「普通さ」を述べつつ、それが【心のこもった出逢いの場所】であることに言及することで、「普通であるが、普通よりもよい場所」として結婚相談所を呈示しているといえる。

「相談所での出会いと恋愛結婚は同じである」ということは、かなり明示的に述べられている場合もある。一例を見てみよう。

結婚相談所というと、「条件で結婚相手を選び・選ばれる場所」だと思っていました。条件はきっかけのひとつであったとしても決め手ではなく、結局はご縁や相性、お相手の人柄だと感じたのでその点は普通の恋愛結婚となら変わらないはずです！「Sさん／三〇代／女性／二〇二二年四月一五日取得」

#### 四・二 成婚相手と「相性」「縁」「運命」

それでは「成婚相手」というカテゴリーに結びついてい  
る概念群のうち、成婚談内で頻繁に見られるものを確認し  
ていきたい。

##### 〈成婚退会を意識〉

一番の決め手はベースが合うこと。例えば食事をし  
ても、同じくらいに食べ終わって、店を出たくなって。  
そんな彼女となら、この先の人生をお互いに我慢をし  
ないで自然体で共に歩めるかなと「Hさん／三〇代／  
男性／二〇二二年四月一五日取得」

〈プロポーズのエピソードを教えてください。〉

「略」彼となら一緒に何でも楽しめて、居心地もよ  
く、なにより自然体でいられたので、迷うことなくプ  
ロポーズをお受けしました。「Kさん／三〇代／女性  
／二〇二二年四月一五日取得」

前者では【お互いに我慢をしないで】【自然体で】いら  
れること、後者では【一緒に何でも楽しめ】ること、【居  
心地】がよいこと、【自然体でいられた】ことが挙げられ  
ている。

一方で、成婚に至らなかった過去の相手については、「自

然体」ではいられなかったということが示されている。

〈お相手の方と成婚退会しようと思われた決め手はな  
んでしたか？〉

肩肘張らずに自然体でいられると思ったことが決め  
手だったかと思えます。これまで婚活パーティー等で  
出会った方に対しては「良く思われたい、嫌われたく  
ない」といった気持ちで接していて、どことなく対等  
に向き合う関係と捉えられていなかったのですが、成  
婚退会のお相手にはそうではなく、至らない点も含め  
て自分自身を受け入れて貰えている感覚があり、同時  
にお相手のこともこれまでの経験・考え方を尊重し、  
お互い対等に自然体で生きていけると思えました。「I  
さん／三〇代／男性／二〇二二年四月一五日取得」

この事例のIさんは、【これまで】の相手に対しては【対  
等に向き合う関係と捉えられていなかった】のに対し、【成  
婚退会のお相手】に対しては【お互い対等】な関係が築け  
ている、というふう、「これまでの相手」と「成婚相手」  
を対照させて述べている。また成婚相手との関係が【肩肘  
張らずに】【自然体で】と表現されており、これが成婚退  
会の【決め手】であると述べられている。ここからは、成  
婚談では単に「成婚相手」と「自然さ」を結びつければよ

いわけではないことがわかるだろう。「他でもないこの人」と結婚する理由として「自然さ」を挙げるためには、そこに「他の人はそうではなかった」という前提が含まれていることが必要なのだ。

〈活動中のお悩みや苦勞したことを教えてください。〉

初対面同士でお互いが緊張している中、相手の良い所を見つけよう、また、自分の事を知って貰おうと色々と考えてしまい、お相手と呼吸が合わず、想像していたほど会話が盛り上がらなかったこともありました。何回か上手く行かない事が続くと、自分のダメなところを必要以上に自分で悪く感じてしまい、新しく会った方とも楽しく話せない、という悪循環に陥ったこともありました。

〈そのお悩みや苦勞はどのように乗り越えられましたか。〉

自分がうまく出せなかったり、楽しい時間を過ごせなかった場合は、相性にご縁の問題だと考えるようになりました。自分らしく、楽しくお話出来て、相手の方も同様にそうであれば、その人が自分にとって相性の良い人なんだろうなと気づくと、ダメだった時も「仕方ない！また頑張ろう！」と思えました。〔略〕「Iさん／三〇代／女性／二〇二二年四月一五日取得」

ここでは、初対面同士で【お互いが緊張している】状況において【相手と呼吸が合わず】、想像していたほど【会話が盛り上がらなかった】こと、それによって自分のダメなところを必要以上に自分で悪く感じ、悪循環を生んでしまったことが、活動上の悩み・苦勞として呈示されている。

このエピソードで成婚者は、【お互いが緊張している】【呼吸が合わない】【会話が盛り上がらない】という事態を述べることを通じて、過去の相手が「自然体でいられる」「居心地がよい」といった状態とは結びつかなかったということを示している。このことよって、過去のその相手が成婚相手にはなりえなかったということを示しているのだ。ここからわかるのは、「主に『自然さ』という点において他の人とは決定的に違う」ということを示すことにより、「結婚の決め手が語られた」ことになる、ということである。さらに注目したいのは、「他の人とは決定的に違う」という主張は、「なぜだかわからないけど……」という前置きや、「相性」「ご縁」「運命」「奇跡」などの概念で「不思議な力に導かれて引き合わされた」と語られることよって、より強化されるといえる点である。

先の事例のIさんは、【自分がうまく出せなかった】ことと【楽しい時間を過ごせなかった】という上記の悩みや苦勞を、【相性】および【ご縁】の問題として考えるようにしたと説明している。ダメだった、つまり「自然体でい

られる」ことと過去の相手とが結びつかなかったことの理由として【相性】、【ご縁】という原理を意識的に導入することにより、必ずしも想像通りにうまくはいかない婚活の結果を「仕方ない」と納得できるものに行っているのである。

【相性】や【ご縁】を持ち出すことで、うまく行かないことに対して「仕方ない」と思えるようになるのは、「相性」や【ご縁】の善し悪しは自らの努力や工夫によって決まるものではない」という原理がこの場面において有効になつてゐることを意味している。すなわち、相談所で意識的に相手を探している場合でも、成婚の決め手となるような「ペースが合うこと」「居心地のよさ」「自然さ」等の問題に関しては、努力や工夫が及ばない、いわば「不思議な力」の働く領域があるという示唆がなされているのである。「人為的な力の及ばない、論理的には説明できない力」を想定していることを示すような語としては、他に「運命」が挙げられる。成婚談の中でも、成婚相手と出会えたことを「運命」と表現している者が一定程度存在していた。

〈お相手の方と成婚退会しようと思われた決め手はなんでしたか？〉

2回目のデートで、彼女の方から昔から知つてゐるような感じがすると言つてくれました。そのように言われたのは初めてでなんだか運命のようなものを感じ

すぐに真剣交際を申し込みました。お付き合いする中で一緒にいることがとても自然に感じ、出会つたばかりとは思えないほど打ち解けることができたので、知り合つて2ヶ月足らずで成婚退会を決めました。「〇さん／三〇代／男性／二〇二二年四月一五日取得」

【出会つたばかりとは思えないほど打ち解けることができた】という表現が可能となつている点に注目すると、ここでは「相手と知り合つてからの時間が短いほど互いに打ち解けにくい」という論理が利用されていることがわかる。デートが【2回目】であることや【知り合つて2ヶ月足らず】で成婚したということへの言及も、相手に慣れ、打ち解けるための時間が十分でないことを示していると判断できよう。だとするならば、【昔から知つてゐるような感じがする】という相手の発言は、そのための時間が十分でない点から、先の原理には反しているものと考えられる。

しかしこの事例において、成婚者は【昔から知つてゐるような感じがすると言つてくれた】という表現を行つてゐる。ここからは、通常の説明原理からの背反を喜ばしいこととして捉えていることが窺える。一体なぜだろうか。

成婚者は、そのようなことを言われたのが【初めて】であると述べ、そこに【運命のようなものを感じ】たと表現した。ここからわかるのは、相手との間に通常の説明原理

では説明のつかない出来事が生じた際、その事態を説明するものとして【運命】すなわち『不思議な力』でそうなるべくしてなった」という論理を用いていること、そしてそのことにより、「今の相手は他の相手とは決定的に異なる」と主張していることである。【運命】という語を用いることにより、成婚者は、「相手に慣れ、打ち解けるための時間が十分でない」という通常の説明原理への違反にもかかわらず打ち解けることができた」という主張をもっともらしくすることができるとのだ。

さらに、この成婚者は【お付き合い】する中で【一緒にいることがとても自然に感じた】と述べている。また【昔から知っているような感じがする】という先の発言も、「自然さ」を表現していると理解可能である。「今までとは違う」と感じる出会いを果たした相手と【一緒にいることがとても自然に感じた】ということ、これが結婚の「決め手」となっているのである。

#### 四・三 「運命の人」との出会い方

ここで、「成婚相手」というカテゴリーと「相性」や「居心地」、「自然さ」という概念が結びつくことを見てきた。さらに、上記概念が実際にうまく結びつきうるか否かは「自分の意志や能力だけではどうにもならない局面における、説明のつかない何らかの力」Ⅱ「相性」・「縁」・「運命」

などによって決定されるという説明が導入されることでより強化されるということを確認した。これは、通常の説明原理では説明がつかないはずの出来事がなぜだか生じた、ということの説明するための論理として使われている。また、成婚相手との間の「相性」・「縁」・「運命」を示すことによつて、「今の相手は他の相手とは決定的に異なる」という主張が達成されていることも見てきた。

つまるところ、成婚談の中で相談所成婚者は、成婚相手が「唯一無二の特別な相手であること」、および「そんな相手と不思議な力に導かれて引き合わされたこと」を示すことにより、その正当性を保証しようとするのである。

ここで確認しておきたいのは、前節で述べた「自分の力ではどうにもならない」ということを示すための「相性がいい」・「縁がある」「運命の相手」といった言及は、それ自体「成婚相手」と結びつく概念となっている、ということである。そしてカテゴリーとこれらの概念との結びつきは、実際にそのカテゴリーを適用可能な者に出会う前から、規範的に想定されるものである。

〈運命を感じたエピソード〉

〔男性側〕同じ頃、とある山形の神社に家族で行ったのですが、その写真をたまたま彼女にメールしたら、なんと彼女も参拝したことがあると！

〔女性側〕彼から送られてきた写真の神社は、私が4年前に行ったことがある場所でした。しかも私がお参りした日は彼の誕生日だったんです！

〔男性側〕自分の誕生日に彼女がこの神社にきていたことを知り、彼女が運命の人だと確信しました

〈ご成婚退会〉

〔女性側〕彼といると楽しく『この人が私の運命の人！』と感じました。担当アドバイザーさんと出会えて入会し、心からよかったと思います「Dさん・Mさん／二〇代／男性・女性／二〇二二年四月一五日取得」

この事例においては、男性側も女性側も、相手を「成婚相手」として記述可能な局面において、「運命の人」という表現を用いている。

他の事例ではどうだろうか。

〈ご自身の婚活体験を振り返り、現在入会をご検討されている方へアドバイスをお願いいたします〉

もっと早く登録すればよかったと思うほど楽しい体験でした。でももっと早くに始めていれば、彼に出会えてなかったかもしれないと思うと、始めたいと思っ

みたいと思っているなら是非始めることをお勧めします！「Mさん／三〇代／女性／二〇二二年四月一五日取得」

この成婚者は、「もっと早く登録すればよかった」と述べる一方で、その直後に「もっと早くに始めて」いたら「彼に出会えてなかったかもしれない」と述べている。それゆえ、当初述べていた「もっと早く登録すればよかった」という結論にも、「早く始めれば始めるほどよい」という結論にも至らず、最終的に「始めたいと思っ」ときが始め時である」と結論づける。

【始めたいと思っ」ときが始め時】であるという認識が可能になるためには、本人がいつ婚活を始めたとしても、その結果出会った「居心地のよい」「自然体でいられる」「相性のよい」相手が、自らの結婚すべき相手、すなわち「ご縁のある人」「運命の人」だという原理が必要である。事実、この成婚談では「彼に出会え」たということを動かし難い基準として、【始めたいと思っ」ときが始め時】であるという結論が引き出されている。上記の原理が成立しているからこそ、成婚に至るまでのどの活動も、今現在成立している「運命」のためには必要だったと言えるのだ。

現に成立している事象がすべてであり、そこから出発して過去の出来事を意味づけていくのであれば、成婚相手

が「運命」であることに對しても同様に論理立てることができる。すなわち成婚者は、成婚相手が「運命」でなければならぬがゆえに、そのことが遡及的に妥当するようストーリーを組み立てるのだ。次の事例は、一度目の成婚退会ののちに婚約解消し、再び相談所に入会して結婚した成婚者の語りである。

婚約解消は辛かったです、あの事件があったからこそ、今の妻と巡り会えたのだと思います。七〇年後の私は、あれは運命だったと断言していることでしよう。「三〇代／男性／二〇二二年四月一五日取得」

これらの事例からわかるように、「成婚相手」と「運命」の結びつきは、実際にそのように思える相手がいるのかどうか、あるいはそうした相手と巡り会えるのかどうかとは関わりなく、規範的に想定されている。したがって、成婚相手が「運命」の相手であることは「成婚した」という結果から遡って認識されることとなる。成婚相手を探す成婚者は、結婚が一旦成立するや、結果としての「運命」を今までの全過程に適用し、その結果を必然とする論理を展開する。つまりこの論法を使用することによって、実質的には何であれ「運命」であり「必然」であると——すなわち、どのような相手に対しても、「今の相手以外にいない」と

語ることができるようになっているのである。

## 五 考察

本稿では、「見合い結婚」が「恋愛結婚」であるということが主張される場合、それが一体どのような論理によって可能となっているのかを、「概念のリマインダー」としての成婚談に立脚して見てきた。

ここまでの結果から明らかになったのは、成婚談の中では、相談所における配偶者選択が「見合い結婚」とみなされるような結婚形態にあること<sup>11</sup>「通常の」結婚形態ではないことを前提とした上で、「ご縁」や「運命」といった概念が使用されていたということである。成婚者は「自分の力ではどうしようもない不思議な力によって、唯一無二の成婚相手と引き合わされた」という形で自らの「結婚」を語り直す実践を行っており、これによりあらゆる結婚は「運命」的なものとして位置づけ直すことが可能となっていた。

そしてこうした論理から見取れるのは、この論理がまさに「恋愛結婚」における配偶者選択の正当化の論理としても利用可能<sup>12</sup>理解可能であるということだ。だからこそ、相談所が「唯一無二の相手と出会うための方法」として適切であることを示すことによって、相談所成婚者は「見合

いも恋愛も同じ」として自らの結婚の特殊性を打ち消したり、さらには「むしろ唯一無二の相手と出会うための方法」としては相談所のほうが適切」とすることで自らの結婚の正当性を高めたりすることができる。

だが、相談所成婚者が上記のような論理を使用して自らの結婚を「理解」させることができるということは、裏を返せば「この論理を使用しなければ『理解』されない、あるいは『理解』されることが非常に難しい」ということでもある。このことはやはり、「結婚＝恋愛＝幸せ」（加藤二〇〇二）という概念の規範的結びつきの圧倒的な強固さを示しているといえるだろう。「見合い結婚／恋愛結婚」という枠組みを使用することは、まさにそうした意味において、成員にとって必要とされているものなのである。こうしたことを考えるならば、研究者側からみた「実態」の把握に有用でないからといって、一足飛びに「見合い／恋愛」概念は研究枠組みとして利用不可能だ・不適切だ、とすることはできないだろう。たしかに、研究者から見た婚姻形態の分類枠組みとして「見合い結婚／恋愛結婚」という区分に不足があることは、すでに述べられた通りである。しかし本稿で明らかにしたことは、人々の実践の中で「見合い／恋愛」枠組みが利用されている点でこの枠組みは紛れもなく「実在」しており、人々はこの枠組みをさまざまに概念と関連づけながら使用することで、自らの結婚を分

類し位置づけているということである。

それならば、「見合い／恋愛」概念がどのように人々に使用されているのか、それを丁寧に解きほぐしていくという配偶者選択研究の行き方もあるはずだ。本稿ではその一端として、結婚相談所を介した配偶者選択を行う人々に「見合い／恋愛」概念の使用法を調査し、「見合い」がいかにして「恋愛」的なものとして主張されるのかという点を明らかにしたといえるだろう。

一方で、こうした方針のもとの研究にも、まだ多くの課題が残されている。例えば本稿では、ここに挙げたものとは異なる語り方をしている事例を取り扱えなかったという点が挙げられよう。具体的には「恋愛をしない」ことを唱える人々の言説を取り扱っておらず、こうした言説に対してどのような分析が可能であるかという問題の解明はまだ果たされていない。またこれに関連して、「恋愛と結婚は別」という言説と、『妥協』しない恋愛結婚の同時的な成立がいかにして可能となっているのか、という点も課題として残されている。こうした論点に関しては、稿を改めて論じたい。

註

- (1) この区分の導入は「出生動向基本調査」の第七回(一九七七年)に端を発しているが、現在の選択項目と同じように、「出会いのきっかけ」の分類として使用され始めたのは第八回(一九八二年)以降である。この項目に対して「見合いで」「結婚相談所で」と回答したものを「見合い結婚」、「職場で」「学校で」「アルバイト先で」「街中で」などと回答したものを「恋愛結婚」と分類しており、岩澤・三田(二〇〇五)など、未婚化・晩婚化に対する影響要因の分析にも大きな影響を与えている。
- (2) ただし後述の通り、この分類法および一般的観念としての「見合い結婚／恋愛結婚」に関しては、一九九〇年代よりすでに多くの反論が提出されている。
- (3) 呼び方自体は「婚活体験談」「成婚ストーリー」等各相談所で異なるが、相談所を利用して配偶者に会った者が、相談所で婚活を振り返って記した談話を、本稿では「成婚談」と表記する。
- (4) ファーストネームや写真・実年齢が掲載されている場合もあり、情報開示の程度は相談所によってまちまちであるが、項目としてはほぼ同じ構成である。
- (5) 結婚を前提として付き合うこと・婚約すること・婚姻届を提出することのどれをもつて「成婚」と呼ぶかは各相談所で異なっているが、いずれの場合も「結婚相手を決めた」という点では共通しているため、本稿ではその相違を問わないこととする。
- (6) なお、相談所での出会いの形態を「見合い」であると前提することができるとは、成婚談の中での成婚者は、相談所を通して成婚相手となる可能性のある人間と出会うことを「お見合い」

と呼ぶからである。

- (7) 本文中において【】で示されているのは、引用した事例の抜き書きである。

文献

Coulter, Jeff. 1979, *The Social Construction of Mind: Studies in Ethnomethodology and Linguistic Philosophy*. London: Macmillan. (＝西阪仰訳、一九九八、『心の社会的構成——ヴィトゲンシュタイン派エスノメソドロジの視点』新曜社)

デビッド・ノッター、二〇〇七、『純潔の近代——近代家族と親密性の比較社会学』慶応義塾大学出版会。

Francis, David and Stephen Hester, 2004, *An Invitation to Ethnomethodology: Language, Society and Interaction*. London: SAGE Publications. (＝中河伸俊・岡田光弘・是永論・小宮友根訳、二〇一四、『エスノメソドロジーへの招待——言語・社会・相互行為』ナカニシヤ出版)

岩澤美帆・三田房美、二〇〇五、『職縁結婚の盛衰と未婚化の進展』『日本労働研究雑誌』五三五：一六・二八。

加藤秀一、二〇〇二、『恋愛結婚』は何をもたらしたか——性道德と優生思想の百年間』筑摩書房。

経済産業省商務情報政策局サービス産業課、二〇〇六、『少子化時代の結婚関連産業の在り方に関する調査研究 報告書』。

小林盾・能智千恵子、二〇一六、『婚活における結婚の規定要因はなにか——結婚研究の視点から、えひめ結婚支援センターを事例とした量的分析』『理論と方法』三二(一)：七〇・八三。

国立社会保障・人口問題研究所編、二〇一七、『現代日本の結婚と出産——第一五回出生動向基本調査（独身者調査ならびに夫婦調査）報告書』。

——、『一九八三、『日本人の結婚と出産——昭和五七年第八次出生力調査第I報告書』。

——、『一九七八、『第七次出生力報告——概報および主要結果表』。小宮友根、二〇一一、『実践の中のジェンダー——法システムの社会的記述』新曜社。

桑原桃音、二〇一七、『大正期の結婚相談——家と恋愛にゆらぐ人びと』晃洋書房。

内閣府政策統括官（共生社会政策担当）、二〇一五、『結婚・家族形成に関する意識調査報告書』。

野々山久也、二〇一四、『婚活コンシェルジュ——結婚相談サービスのあり方を考える』ミネルヴァ書房。

佐藤博樹・永井暁子・三輪哲、二〇一〇、『序章『出会い』と結婚への関心』『結婚の壁——非婚・晩婚の構造』勁草書房、一・一〇。

谷本奈穂・渡邊大輔、二〇一六、『ロマンティック・ラブ・イデオロギー再考——恋愛研究の視点から』『理論と方法』三一（一）…五五・六九。

## 資料

オネット公式ホームページ（二〇二二年十月三十一日取得、<https://onet.co.jp/>）

IBJメンバーズ公式ホームページ（二〇二二年四月一五日取得、<https://www.loungemembers.com/>）

ツヴァイ（ZWEI）公式ホームページ（二〇二二年四月一五日取得、<https://www.zwei.com/>）

パートナーエージェント公式ホームページ（二〇二二年四月一五日取得、<https://www.p-a.jp/>）

結婚物語。ブログ（二〇二二年四月一五日取得、<https://ameblo.jp/kekkon-monogatari/>）

（二〇二二年十月三十一日投稿受理、二〇二二年五月九日掲載決定）